



テロスを読む

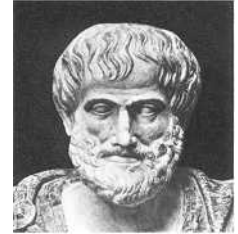
～ 最高のフルートは、誰の手に ～

永田円了

Life is best when it is authentic.

テロスとは、ギリシャ語で「意義、目的、目標」、のことである

人生が輝く時とは、どういう時であろうか。それは、本来の自分が発揮できたときである。では、何故本来の自分が発揮できたとき、人生が輝くのだろうか。この問いに、紀元前に生きたアリストテレスは次のように語る。



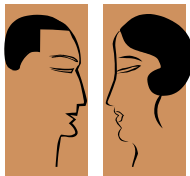
最高のフルートは、誰の手に渡すべきか

この世で最高のフルートがあるとしよう。そのフルートは一体誰の手に渡すべきなのだろうか。金持ちが手にすべきか、貴族か、最もほしがっている人が、それとも、平等主義者がいともかもしれないクジ引きを採用するのか。一体この問いにどう答えよう。

アリストテレスの答えは、こうである；最高のフルートは、最高のフルート奏者に与えられるべきと。

でも、それは何故か。彼らが最高の音楽を奏でるからか、それとも、皆が音楽をもっと楽しめるからか。いや違う。

アリストテレスの答えは、「最高のフルートが、最高のフルート奏者に渡されることが、そのフルートの目的だから」である。



男と女

私たちが、パートナーを選ぶときに働く意識は普通、「私の考え、私の感情、私の経験」である。そしてこの「私の・・・」を基にその時の判断をする。では、今回のテーマ、「テロス(目的)」の視点からパートナー選びをするなら、一体どうなるのであろうか。

前述のアリストテレスの答え；最高のフルートは、最高のフルート奏者が手にすべきである、を思い出して頂きたい。私たちの存在は、1人ひとりが世界でオンリーワンである限り、唯一最高のフルートである。であるなら、その存在を手にすべき者は、最高のフルート奏者であらなければならない。つまり、そのフルートの目的(テロス)を知り、その存在を最大限に生かす人のみが、そのフルートを手にする権利があるということである。

1942年制作の映画「カサブランカ」が、70年近くの歳月を経てもまだ多くの人の感動を呼び起こすのは、このテロス論に基づいた意識・行動が仕切る筋書きだからである。ハンフリー・ボガードが渋い、ということもさることながら、パートナーを目的論的に選ぶということは、その目的に一番かなった人に道を譲る、ということである。

二人の男が1人の女性を好きになるという三角関係、ドロドロの血なまぐさい結果になってもおかしくない、にも拘わらず、かくも感動的なエンディングを迎えることができるのは、今回のテーマ、テロスが仕切る人間の美学が見事に表されているからである。

ユングの知恵

結局のところ我々は、本質的なものを具体化する時にのみ価値を認め、本質的なものを具体化しないときは、生命が浪費される。人間にとって決定的な問いは、彼/彼女が何か無限なものに関係しているかどうか、ということである。



< 事例 >

NHK ハーバード大学白熱教室 アリストテレス / 最高のフルートは誰の手に

クマのプーさんの事例 / ハチミツが僕のテロス(目的)ではなかったのだ

NHK クローズアップ現代『プロボノ』 7月1日、2010年 ～広がる新たな社会貢献のカタチ～

加山雄三「君といつまでも」(1965年) / 自分の思い、感情、体験を基準にしたパートナー選び

岸洋子「聞かせてよ、愛の言葉を」 / 感情のみに、身をまかせる

美空ひばり「悲しい酒」 / 感情に負けた自分を美化する

映画「卒業」ラストシーン、テロスがちょっと見え隠れする

カメレオンの求愛 / オスはメスのテロスを自覚する

映画「カサブランカ」1942年制作、テロスに基づいた意識行動 / だから感動できる